

「後拾遺和歌集」の「詞書」の語彙について

若林俊英

一

本稿は、第四勅撰集である「後拾遺和歌集」の詞書・左注（以下、「後拾遺詞書」と略称する）の自立語語彙に関して、いささか考察を加えたものである。

「後拾遺和歌集」は、周知のように、白河天皇の勅命により、白河朝の復古・天皇中心主義を背景に、三代集にならって編纂された⁽¹⁾ものであり、

総じて古今集以下の構成上の規範に拠る点が多いことも否定し得ないが、同時に素材面を含めての新機軸による構成も認めざるを得ず、旧風に則りながらも、併せて編者の庶幾する新風が幅広く示されている⁽²⁾

ものでもある。

「後拾遺和歌集」の歌風・構成・詞書等については、諸先学により、叙景歌の変質、雑部の詞書の長文化傾向、題知らず歌、「心を詠める」の急増、地名歌の増大、暦日による和歌の排列、漢詩の浸透等に関する考察⁽³⁾がなされている。

本稿は、このような「後拾遺詞書」の語彙について、主として三代集の詞書・左注（以下、「詞書」と略称する）の語彙と比較することにより、その特色の一端をみようとすものである。

語彙調査をするに当たつての単位語のとり方については、宮島達夫氏編『古典対照語い表』（昭和四六年九月、笠間書院。以下、『語い表』と略称する）における認定基準を、おおむね使用させていた⁽⁴⁾いた。また、本文は、川村晃生氏校注『後拾遺和歌集』（平成三年三月、和泉書院。底本は、宮内庁書陵部蔵『後拾遺和歌抄』）により、語数調査に関しては、西端幸雄氏編『後拾遺和歌集総索引』（平成四年九月、和泉書院）の学恩に浴した⁽⁵⁾。なお、以下、語数に関しては、

特に注記しない限り、異なり語数とする。

二一

「後拾遺詞書」の自立語彙は、異なり語数で一五七五語、延べ語数で九〇〇四語であり、平均使用度数は五・七二となる。これらの数値を、かつて調査した三代集における「詞書」と比較すると、そのすべてにおいて「後拾遺詞書」での数値が大きくなる。たとえば、平均使用度数で見ると、「古今和歌集」「後撰和歌集」「拾遺和歌集」の詞書・左注（以下、それぞれ「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」と略称する）におけるそれは、それぞれ四・四四、五・四九、四・〇四となり、「後撰詞書」に比較的近いものとなっている。また、表(1)は、各歌集における歌数と異なり語数・延べ語数との関係を示したものであるが、「後拾遺詞書」におけるB/A、C/Aの値は、他の「詞書」における同様な数値よりも相当高く、これからも「後拾遺詞書」の語彙の豊富さが浮き彫りにされる。したがって、諸先学が説かれる「後拾遺和歌集」の雑部における詞書の長文化傾向は、「後拾遺詞書」における一般的傾向であるとも言えそうである。

2

次に、「後拾遺詞書」の基幹語彙についてふれる。

どのような語をもって、その作品の基幹語とするかについては、慎重な検討の必要があるが、ここでは、延べ語数の一パーミル以上の

表(1)

作品名	歌数(A)	異なり語数(B)	延べ語数(C)	B/A	C/A
古今詞書	1,111	882	3,918	0.79	3.53
後撰詞書	1,425	1,276	7,002	0.90	4.91
拾遺詞書	1,351	1,287	5,202	0.95	3.85
後拾遺詞書	1,218	1,575	9,004	1.29	7.39

使用度数を持つ語をもって、仮に基幹語とする。

前述のようにすると、「後拾遺詞書」の基幹語彙は、異なり語数で一八七語、延べ語数で六〇七一語となる。この延べ語数六〇七一語は、「後拾遺詞書」の延べ語数九〇〇四語の六七・四三パーセントとなる。この数値は、西田直敏氏が調査された「平家物語」の基幹語彙における同様な数値七六・四パーセント、大野晋氏が示された「平安時代和文脈系文学の基本語彙」（以下、「平安和文基本語彙」と略称する）で同様な数値七九パーセントとは、かなりの差があるものの、筆者がかつて調査した「千載和歌集」「新古今和歌集」の詞書・左注（以下、それぞれ「千載詞書」「新古今詞書」と略称する）の語彙や、「後撰詞書」「拾遺詞書」の語彙における同様な数値七一・五四パーセント、七一・一九パーセント、七一・一一パーセント、六七・一

3 「後拾遺和歌集」の「詞書」の語彙について

三パーセントと、比較的近いものとなっている。したがって、この一八七語を「後拾遺詞書」の基幹語彙とすることには、ある程度の妥当性があると考え、以下の基幹語彙に関する考察に使用した。なお、資料として「後拾遺詞書」の基幹語彙を頻度順に示したので、参照願いたい。

三一 一

次に、「後拾遺詞書」の基幹語彙と、大野晋氏が示された「平安和文基本語彙」とを比較し、いささか考察を加えたい。

表(2)は、「後拾遺詞書」の語彙と「平安時代和文脈系文学」の語彙とを、それぞれ累積使用率により十段階に分け、「後拾遺詞書」の基幹語彙と「平安和文基本語彙」に関する部分を抜き出し、前者を基準にして、段階別にその所属語数を示したものである。したがって、「後拾遺詞書」の基幹語彙は、その累積使用率からして、表(2)のように七段階の一部までとなるが、「平安和文基本語彙」の方は、考察の都合上、八段階の一部まで示した。なお、表(2)中の「非共通語」とは、あくまでも「平安和文基本語彙」と共通しないという意味であり、「平安時代和文脈系文学」にその使用例が存しないという意味ではないことを一言つけ加えておく。

ところで、どの程度の所属段階差がある語をもって特異な使用語とするかについては、様々な考え方があろうが、ここでは同様な調査を行った拙稿との関係から、一応、上、下各二段階以上の差があるもの

表(2)

段 階	共通語数	「平安和文基本語彙」での段階								非共通語
		1	2	3	4	5	6	7	8	
1	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0
2	6	2	0	1	0	2	0	1	0	0
3	9	0	2	1	3	1	1	0	1	1
4	16	2	2	2	3	3	2	1	1	1
5	30	1	4	2	4	10	4	3	2	3
6	50	0	1	3	5	12	8	13	8	9
7	42	1	0	2	3	7	12	13	4	18
計	155	6	10	11	18	36	27	31	16	32

をもって特異な使用語とする。

前述のような条件をもとにすると、表(2)からわかるように、特異な使用語は、①段階一語、②段階三語、③段階三語、④段階八語、⑤段階一二語、⑥段階一七語、⑦段階一三語の、計五七語となる。

以下、具体的にそれらを示すと、

I 「後拾遺詞書」における所属段階の方が上位の語

「よむ(詠)」「つかはず(遣)」「もと(元・本・下)」「をんな(女)」「いへ(家)」「ころ(頃)」「まかる(罷)」「あそん(朝臣)」「うた(歌)」「かへし(返)」「さき(先・前)」「うぢ(宇治地名)」「おこす(遣)」「かへりごと(返言)」「くだる(下)」「びやうぶ(屏風)」「あした(朝)」「さつき(五月)」「つとめて(早朝)」「なくなる(無)」「なぬか(七日)」「にふだう(入道)」「はづき(八月)」「ふみつき(七月)」

(以上、二四語)

II 「平安和文基本語彙」における所属段階の方が上位の語

「あり(有)」「こと(事)」「なる(成)」「もの(物・者)」「うち(内・内裏)」「うへ(上)」「おもふ(思)」「この(此)」「なし(無)」「ほど(程)」「みや(宮)」「いづ(出)」「かく(斯)」「かた(方)」「その(其)」「つく(付・着、下二段)」「なか(中・仲)」「まうす(申)」「よ(世)」「わたる(渡)」「いかが(如何)」「いと(甚)」「いま(今)」「けふ(今日)」「こ(子)」「すぐ(過)」「とうぐう(東宮)」「としごろ(年頃)」「なく(鳴、四段)」「にようご(女御)」「みゆ(見)」「むかし(昔)」「ゐん

(院)」

(以上、三三語)

のようになる。

以下、I、IIの順に具体的に考察を加える。

2

まず、「後拾遺詞書」における所属段階の方が上位の語についてふれる。

ここに所属するのは、前掲の二四語であるが、これらを、かつて調査した「詞花和歌集」の詞書・左注(以下、「詞花詞書」と略称する)の語彙や、「後撰詞書」「拾遺詞書」「千載詞書」「新古今詞書」の語彙における同様な語群と比較すると、全作品と共通する「つかはず」「まかる」をはじめとして、その多くは他作品と共通している。他の「詞書」における同様な語群と共通しないものは、「ころ」「うぢ」「さつき」「つとめて」「ふみつき」の、わずか五語に過ぎない。この五語をみて特徴的なことは、すべてが時・場所に関するものであるということである。ここに、「詞書」の持つ一般的な性格がよく表れていると同時に、「後拾遺詞書」の特徴がうかがえそうである。

なお、この語群において注目しなければならないものとしては、「さき」「ころ」があるが、以下、この二語についていささかふれる。

「後拾遺詞書」における「さき」の使用度数は四七であるが、うち四四例が、

例1 宇治前太政大臣花みなむ、とききてつかはしける

(一一三)⁽¹³⁾

例2 関白前大まうちぎみいへにて、かつまたのいけをよみ侍りけるに
(一〇五三)

のような、人物に関する使用例である。この四四例の「さき」が使用されている和歌(四一首)の詠者を、上野理氏がなされた時代区分によつて分類してみると、赤染衛門・伊勢大輔・公任・相模・能因・頼宗等、その多くが第二期・第三期の歌人であり、第四期の歌人と考えられるのは、顕房・俊房等、数人に過ぎないことがわかる。このようなことから考えると、第二期・第三期を重視した撰者通俊の撰歌態度が、結果的に「詞書」で「宇治前太政大臣」「関白前左大臣」「関白前太政大臣」「前伊勢守義孝」「前藏人」「前齋院」「前僧正明尊」「前中宮」「二条前太政大臣」「入道前太政大臣」「六条前齋院」のような人物表記を行わせることとなり、それが「さき」の頻用に結びついたと考えられる⁽¹⁶⁾。なお、「うぢ」についても、その多くが「宇治前太政大臣」としてのものであり、やはり撰者通俊の撰歌態度の結果と考えられる。

次に、「ころ」についてふれる。

表(3)は、「後拾遺詞書」と、かつて調査した「詞書」とに使用された「ころ」および「とき」の使用度数をまとめたものである。

この表(3)を一瞥するだけで、「後拾遺詞書」における「ころ」の頻用がわかるであろう。このような各「詞書」における「ころ」の使

表(3)

	ころ	とき
古今詞書	2	147
後撰詞書	31	59
拾遺詞書	23	150
後拾遺詞書	73	100
詞花詞書	21	42
千載詞書	27	382
新古今詞書	53	241

用差は、単に撰集資料の差としては片づけられないと思われるので、以下、「後拾遺詞書」における「ころ」の使用実態を、「とき」と比較することによつてみることにする。

「後拾遺詞書」においては、

例3 一条院御時、殿上人はるのうたとてこひはべりければよめる
(一〇〇)

のような「御時」の用例を除いた「とき」の使用度数は五七となるが、これらの用例を、より詳しくみると、その多くが、

例4 冷泉院春宮と申しける時、
(二六八)

例5 通宗朝臣のとのかみにてはべりけるとき、
(一一二)

のような類型化した表現の中で使用されていることがわかる。一方、「ころ」においては、その使用はバラエティーに富むが、「とき」の

例にみられるような、「人物ヲ…(地位・身分)…トイウ時」「人物ガ

…(地位・身分)…デアル時」のような例はほとんどみられず、

例6 大江公資相模の守にはべりけるとき…、遠江守にてはべりけるころ…
(九一五)

例7 橘則長ちちのみちのくにのかみにてはべりけるころ、…

のような例が散見される程度である。

では、このような表記上の偏りが「後拾遺詞書」に特有なものであるかどうかを探るために、「拾遺詞書」をみることにする。

「拾遺詞書」における「ころ」と「とき」の使用度数は、表(3)のとおりであるが、「後拾遺詞書」における例3のような使用例を除いた場合、「とき」の使用度数は六八となる。

「後拾遺詞書」における例4・例5のような場合は、「拾遺詞書」においても同様に「とき」が使用され、例外はないようである。しかし、そのような例は、「とき」の全用例六八例の約三〇パーセントに当たる二一例に過ぎず、他は、

例8 承平四年中宮の賀し給ける時の屏風に (四七)⁽¹⁹⁾

例9 天曆御時前裁のえんせさせ給ける時 (二九四)

のような「時」を限定した場面での使用例が多いものの、「ころ」を使用することも可能な例も存する。なお、「拾遺詞書」における「ころ」の用法は、「後拾遺詞書」におけるそれと大差ないようである。

以上のような点から考えると、「拾遺詞書」での「とき」の比較的自由な使用と異なり、「後拾遺和歌集」の撰者通俊は、例4・例5のような類型化した表現では、原則的に「とき」を使用し、それ以外では、限定的な「時」を示す「とき」の使用が可能であろう。「詞書」の場合でも、漠然と「時」を表す「ころ」を使用するという、書式の統一・整備⁽²⁰⁾をしているようである。そして、このような撰集意識が、結

(九五四)

果的に「ころ」を頻用することになったのであろう。

3

次に、「平安和文基本語彙」における所属段階の方が上位の語群についてふれる。

ここでの考察の対象となるのは、前述の三三語であるが、これらをついて調査した「詞書」の同様な語群と比較すると、「古今詞書」とは一九語、「後撰詞書」とは二四語、「拾遺詞書」とは一八語、「詞花詞書」とは二二語、「千載詞書」とは一七語、「新古今詞書」とは一七語、それぞれ共通することがわかった。また、六作品と共通する「あ語」それぞれ共通することがわかった。また、六作品と共通する「あり」「なる」「もの」「おもふ」「なし」、五作品と共通する「こと」「うへ」「この」「ほど」「みや」「その」「みゆ」をはじめとして、そのほとんどが他作品と共通しており、共通しないものは、「けふ」「すぐ」「にようご」の、わずか三語であることもわかった。

表(4)は、各「詞書」での「けふ」「すぐ」「にようご」の使用度数を示したものである。この表から、「けふ」「すぐ」に関しては、「後拾遺詞書」以外の「詞書」においては基幹語彙にもならない程使用度数が少ないことがわかる。むしろ、「後拾遺詞書」での使用度数の多さが注目に値するものであろうこともわかる。

以下、「けふ」について、いささかふれる。

「後拾遺詞書」における「けふ」の使用度数は、表(4)でわかるように一〇である。これらの「けふ」の中には、

例10 ひごろけふとたのめたりける人の、さもあるまじげにみえ侍
ければよめる (六六三)

のような使用例もあるもの、他は、

例11 正月七日卯日にあたりてはべりけるに、けふはうづゑつきて
や、など通宗朝臣のもとよりいひにおこせてはべりければよ
める (三三三)

のような会話(書簡・心話を含む)中での用例であり、一般的に長文
の「詞書」で使用されている。

表(4)

	け ぶ	す ぐ	によ うご
古今詞書	1	2	0
後撰詞書	1	1	3
拾遺詞書	0	0	10
後拾遺詞書	10	9	9
金葉詞書	0	1	3
詞花詞書	1	0	2
千載詞書	1	4	1
新古今詞書	1	4	16

ところで、「後拾遺和歌集」における長文の詞書について、武田早

苗氏は、

長文の詞書が増加するのは、単に資料的な問題にとどまらず、後
拾遺集の側に和歌の詠まれた事情やそれらをめぐるエピソードを

も幅広くとどめようとする意識が介在していたからに違いないと
思う⁽²³⁾

とされているが、武田氏の言われるような撰者通俊の意識が、結果的
に「けふ」の頻用につながっていると思われる。

以上、「平安和文基本語彙」における所属段階の方が上位の語群を
みてきた。ここには、「あり」「なし」「もの」「こと」「なる」「この」
「その」等、簡潔性と具体性とを重視する「詞書」の性格とは対極に
あると考えられる語が、当然のことながら多数所属していることがわ
かった。

4

次に、「平安和文基本語彙」とは共通しない語群についてふれるこ
とにする。

表(2)で示したように、ここで考察の対象となるのは三二語である。
便宜的にはあるが、この三二語を分類すると、

I 和歌関係

「いひおこす(言遣)」「いひつかはす(言遣)」「うたあはせ(歌
合)」「かきつく(書付)」「だい(題)」「むすびつく(結付)」

II 時・時間

「えいしよう(永承、年号)」「にねん(二年)」「ね(子)」「はじ

めて(始)」「よねん(四年)」

III 人物

「いちでうゐん(一条院)」「うだいじん(右大臣)」「ごれいぜい
るん(後冷泉院)」「さだより(定頼)」「じやうとうもんゐん(上
東門院)」「だいじやうだいじん(太政大臣)」「ちち(父)」

IV 場・場面

「かれがれ(離離)」「だいら(内裏)」「つくし(筑紫)」「はなみ
(花見)」「みちのくに(陸奥国)」「やまでら(山寺)」「みなか
(田舎)」

V その他

「いたし(甚・痛)」「おとづる(訪・問)」「たのむ(頼、下二
段)」「まうでく(詣来)」「まかりくだる(罷下)」「もてあそぶ
(弄)」「をさなし(幼)」

のようになる。

この分類および所属語から、ここに所属する語の多くが和歌に関す
るものと、「詞書」の基本的要素である時・人・所に関するものであ
ることがわかるであろう。

ところで、この「平安和文基本語彙」とは共通しない語群には、他
の「詞書」における同様な語群と共通するものと、共通しないものと
があるが、以下、共通しない語を中心に、いささか述べたい。

表(5)は、「平安和文基本語彙」とは共通しない「後拾遺詞書」の
基幹語彙のうち、「金葉和歌集」を除く他の六作品の「詞書」の基幹

表(5)

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今
いちでうゐん	0	0	0	9	5	2	6	1
えいしよう	0	0	0	16	2	1	1	3
おとづる	0	4	1	10	9	2	2	4
かれがれ	0	0	0	11	6	1	1	1
ごれいぜいゐん	0	0	0	18	8	2	3	6
さだより	0	0	0	11	0	0	1	0
ちち	3	3	1	14	1	1	2	1
むすびつく	1	1	1	10	4	0	2	3
もてあそぶ	0	0	1	10	7	0	0	1
みなか	0	1	3	11	0	0	0	1
をさなし	0	0	1	9	0	0	0	5

語彙とはならない一語と、各「詞書」における使用度数をまとめたものである。なお、「金葉和歌集」の「詞書」の基幹語彙については未調査であるので、注(17)の総索引により数えた数値を参考に示した。

表(5)に示した一語は、三代集の「詞書」において使用されていないものと、使用されているものとに、大きく二分することができる。前者としては、「いちでうみん」「えいしよう」「これいぜいみん」「さだより」「かれがれ」の五語があるが、うち、「かれがれ」を除く四語は、時代や撰集資料の関係で、三代集の「詞書」においては使用され得ない語であることがわかる。また、後者のうち、前後の「詞書」での使用度数との関係で、「後拾遺詞書」において特にその度数が目立つ語としては、「ちち」「むすびつく」「ゐなか」「をさなし」であろう。このうち「ちち」「むすびつく」「をさなし」と、前者で指摘した「かれがれ」については、三―3でもふれたように、エピソードの記述に気を配る「後拾遺和歌集」の撰者通俊の撰集意識の結果の頻用とは考えられないであろうか。

以上の他に、この「平安和文基本語彙」とは共通しない語群において注意しなければならない語として、「つくし」「はなみ」の二語を指摘したい。

表(6)は、各「詞書」における「つくし」「はなみ」の使用度数を示したものである。⁽²⁵⁾この表(6)によれば、「つくし」は「拾遺詞書」の、「はなみ」は「詞花詞書」の、それぞれ基幹語とはなっているものの、どちらも「後拾遺詞書」において、特に頻用されていることが

わかるであろう。

ところで、久保田淳氏は、「後拾遺詞書」に表れた「自覚的な花見」について、

花見という行為が多く見出されることには、受動的ではなく、能動的、積極的に自然に働きかけ、これに耽溺してゆこうとする心を認めてよいであろう⁽²⁶⁾

とされ、「はなみ」という語の増加を、叙景歌の変質という観点からとらえられている。とするならば、この「はなみ」という語は、ある種の時代語的要素を持ったものであると言えるであろうし、その頻用は、撰者通俊の撰集意識によっても言えそうである。

表(6)

	つくし	はなみ
古今詞書	2	1
後撰詞書	3	1
拾遺詞書	7	0
後拾遺詞書	21	10
金葉詞書	4	4
詞花詞書	1	3
千載詞書	1	2
新古今詞書	6	4

一方、「つくし」の頻用は、「後拾遺和歌集」の歌風の一つである地名歌の増大ともかかわっていると思われるが、「ゐなか」という語の頻用とともに、

この集の各部の随所に種々の地名を配置したことは、勅撰集たる後拾遺集に、この国を隔々まで統治する天皇の政治性のシンボルとしての意味合を付与せしめている、とも考え得るであろう⁽²⁷⁾とされるような、撰者通俊の撰集意識に基づいていると考えることができるのではなからうか。

以上、「平安和文基本語彙」とは共通しない語群についてみてきたが、ここには、多くの「詞書」と共通する、いわゆる「詞書」の基層語的なものと、撰者の撰集意識や時代的制約を背景にした、ある種の時代語的なものが混在していることがわかった。

四—1

次に、「後拾遺詞書」の語彙の語種別、品詞別特色についてふれることにする。

表(7)は、三—1において行ったのと同様な方法による段階分けを「後拾遺詞書」の語彙について行い、各段階ごとに語種別、品詞別の所属語数をまとめたものである。

以下、この表(7)を用い、語種別、品詞別の順に、その使用実態について、いささかの考察を加えたい。

2

まず、語種別の使用実態についてふれる。

「後拾遺詞書」の語彙における語種別構成比は、表(7)に示したよ

表(7)

段階	所属語数	語種別語数			品詞別語数									
		和語	漢語	混種	名詞	動詞	形容	形動	副詞	連体	接統	感動	句等	
1	2	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	
2	6	6	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	
3	10	9	1	0	6	4	0	0	0	0	0	0	0	
4	17	17	0	0	13	3	0	0	1	0	0	0	0	
5	33	30	3	0	19	10	2	0	0	2	0	0	0	
6	59	52	6	1	33	21	2	0	1	2	0	0	0	
7	86	67	18	1	53	23	5	2	3	0	0	0	0	
8	142	109	31	2	106	30	3	0	3	0	0	0	0	
9	421	341	71	9	289	96	15	8	11	1	1	0	0	
10	799	638	139	22	563	169	30	20	14	1	0	1	1	
合計	1,575	1,271	269	35	1,085	361	57	30	33	6	1	1	1	
	%	80.7	17.1	2.2	68.9	22.9	3.6	1.9	2.1	0.4	0.1	0.1	0.1	

うに、和語八〇・七パーセント、漢語一七・一パーセント、混種語二・二パーセントである。これらの数値を、かつて調査した他の「詞書」でのものと比較すると、和語においては、「古今詞書」「後撰詞書」よりは低く、「拾遺詞書」「詞花詞書」「千載詞書」「新古今詞書」よりは高いものであることがわかる。一方、漢語においては、和語と逆の関係にあることもわかる。この点からすると、「後拾遺詞書」の語彙における語種別構成比は、おおむね、時代が新しくなるにつれて和語の比率が低下し、漢語の比率が高まるという、「詞書」の語彙の語種別構成比における一般的傾向の枠内にあるものであると言える。

一般の散文においても、時代が下るにつれて漢語の比率が高まることが『語い表』の統計からも見てとれるが、保守的と考えられる和歌に関わる「詞書」においても、時代の影響を強く受けていることが、前述のような結果からもうかがえる。

3

次に、品詞別の使用実態についてふれる。

『語い表』所載の一四作品のうち、異なり語数における名詞の比率の最も高い作品は、「大鏡」の六三・九パーセント、次いで「万葉集」の五九・七パーセントとなっているが、「後拾遺詞書」におけるそれは、表(7)に示したように六八・九パーセントであり、「大鏡」における比率よりも高い。また、かつて調査した「詞書」における名詞の比率と比較すると、「後撰詞書」よりも相当高く、「古今詞書」「詞花

詞書」より多少高いものの近似し、「拾遺詞書」「千載詞書」「新古今詞書」より低いものであることもわかった。一方、異なり語数における動詞の比率に関してみると、『語い表』所載のどの作品よりも低く、他の「詞書」との比較では、名詞の場合と逆の関係にあることがわかった。

形容語類(形容詞・形容動詞・副詞・連体詞)の異なり語数における比率(八・〇パーセント)について、『語い表』所載の一四作品と比較すると、「万葉集」よりは高いものの、他の一三作品よりも低いことがわかった。また、他の「詞書」との比較では、「後撰詞書」に次いで高く、「詞花詞書」に近似したものであることもわかった。一方、延べ語数における比率(五・九パーセント)に関して、他の「詞書」と比較すると、異なり語数の場合と同様、「後撰詞書」に次いで高いこともわかった。

ところで、筆者はかつて「後撰詞書」における形容詞・形容動詞の比率の高さに注目し、「古今詞書」との比較において、「後撰詞書」の物語的性格の強さを指摘したことがあるが、この「後拾遺詞書」の形容語類の比率の高さも注目に値するものであろう。では、いったい、このような形容語類の比率の特異性は、いかなる理由によるのであるか。やはり、説話文学の発展・興隆という時代的背景や、「栄花物語」や「今昔物語集」との共有歌が多いという資料的な問題を踏まえた、撰者通俊の撰集意識が「詞書」の散文的傾向をまねき、結果的に形容語類の頻用につながったと考えることはできないであろうか。

以上、「後拾遺詞書」の語彙における品詞別構成比をみてきたが、一般の散文よりも名詞の比率が高く、動詞の比率が低いという、他の「詞書」と同様な傾向にあることがわかった。また、形容語類の使用比率からみると、「後撰詞書」を除く他の「詞書」よりも散文的傾向が強いものであることもわかった。

五—1

「後拾遺和歌集」の歌風・構成・詞書等の特性については、一でもふれたが、以下では、これらの特性のうち、地名歌の増大、暦日的排列という二点について、その反映が「後拾遺詞書」の語彙にみられるかどうかを考えることにする。

2

「後拾遺和歌集」の歌風の特性の一つとして、地名歌の多さがあげられている。三—4では、「詞書」における「つくし」の頻用についてふれたが、以下、歌風の特性ととの関係で特徴的であろうと思われる「後拾遺詞書」に使用された地名関係語彙について再度考えたい。

表(8)は、「後拾遺詞書」の語彙と、三代集の「詞書」のそれとにおける地名と思われる語の異なり語数・延べ語数、他の「詞書」とは共通しない地名と思われる語の異なり語数、各「詞書」における異なり語数・延べ語数に対する比率をまとめたものである。この表(8)から、地名に関する語彙の異なり語数での比率においては、「古今詞書」

表(8)

	異なり語数	比率	延べ語数	比率	非共通語	比率
古今詞書	90	10.2	173	4.4	34	3.9
後撰詞書	68	5.3	127	1.8	17	1.3
拾遺詞書	110	8.5	202	3.9	46	3.6
後拾遺詞書	149	9.5	374	4.2	78	5.0

「後拾遺詞書」では四一語となり、地名に関する語彙全体でみた場合とかなり様子が違ってくる。また、国名に関する語彙のうち、他の「詞書」とは共通しないものは、「古今詞書」に三語、「後撰詞書」に三語、「拾遺詞書」に五語、「後拾遺詞書」に一五語存する。この結果

が最も高く、次いで「後拾遺詞書」「拾遺詞書」の順に、また、延べ語数での比率においても同様な順となることがわかる。一方、他の「詞書」とは共通しない語における比率をみると、「後拾遺詞書」が最も高く、次いで「古今詞書」「拾遺詞書」の順となる。以上、地名に関する語彙全体について、その比率をみたが、ここからは、当初予想したような「後拾遺詞書」の語彙の特異性はみいだせなかった。

次に、地名に関する語彙のうち、最もその性格が強いと思われる国名に関する語彙についてみることにする。各「詞書」で使用された国名に関する語彙は、異なり語数で見ると、「古今詞書」では一九語、「後撰詞書」では二二語、「拾遺詞書」では二二語、

は、「後拾遺詞書」における国名に関する語彙の使用の特異性を示すものと言えそうである。

次に、前述の、他の「詞書」とは共通しない国名を示す語を具体的に示すと、

I 「古今詞書」でのみ使用されたもの

「かふち(河内)」「しもつふさ(下総)」「たちま(但馬)」「

II 「後撰詞書」でのみ使用されたもの

「あはぢ(淡路)」「いなば(因幡)」「とさ(土佐)」「

III 「拾遺詞書」でのみ使用されたもの

「いはみ(石見)」「おほすみ(大隅)」「かづさ(上総)」「ひぜん

(肥前)」「ぶぜん(豊前)」「

IV 「後拾遺詞書」でのみ使用されたもの

「いが(伊賀)」「いづも(出雲)」「いよ(伊予)」「きい(紀伊)」「

「すはう(周防)」「たんご(丹後)」「たんば(丹波)」「ちくご

(筑後)」「ちくぜん(筑前)」「ながと(長門)」「のと(能登)」「

「びぜん(備前)」「びつちゆう(備中)」「ゑちぜん(越前)」「を

はり(尾張)」「

のようになる。これをみれば、「後拾遺詞書」において単独で使用されている語が、東海道・北陸道・山陽道・山陰道・南海道・西海道と、非常に広範囲なものであることがわかる。

以上、地名に関する語彙をみてきたが、「後拾遺詞書」における国名に関する語彙の使用には、他の「詞書」にはない多さと広さが存し、

この点において特徴的であると言えそうである。

3

次に、暦日関係の語彙についてみる。

表(9)は、「後拾遺詞書」の語彙と、それに先行する三代集の「詞書」の語彙とにおける暦日関係語彙の異なり語数・延べ語数をまとめたものである。

表(9)をみると、「後拾遺詞書」における数値は、異なり語数で三三語と、最も少ない「古今詞書」の約二倍となっていることがわかる。しかし、各「詞書」の異なり語数に対する比率をみると、「古今詞書」一・八パーセント、「後撰詞書」一・五パーセント、「拾遺詞書」二・一パーセント、「後拾遺詞書」二・一パーセントとなり、「後拾遺詞書」での使用は、必ずしも特徴的であるとは言えない。これは、暦日に関する異なり語の絶対数が少ない以上、当然の帰結と思われる。

一方、暦日関係語彙の延べ語数の、各「詞書」の延べ語数に対する比率をみると、「後拾遺詞書」では二・一パーセントとなり、「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」での同様な値〇・九パーセント、一・二パーセント、一・五パーセントと、相当差があることがわかる。

表(9)

	異なり語数	延べ語数
古今詞書	16	36
後撰詞書	19	82
拾遺詞書	27	76
後拾遺詞書	33	187

次に、「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」「後拾遺詞書」に使用された「月」を示す「むつき」から「しはす」までの延べ語数をみると、⁽³⁸⁾それぞれ一八語、五一語、四二語、一一三語となる。これらの数値と各歌集における歌数との関係を見ると、「古今詞書」では六一・七首に一語の割で「月」を示す語が使用されているのに対し、「後拾遺詞書」においては、約六倍に当たる一〇・八首に一語の割で使用されていることがわかる。また、「後拾遺詞書」においては、「むつき」から「しはす」までのすべての使用例があるのに対し、「古今詞書」には「きさらぎ（二月）」「さつき（五月）」「はづき（八月）」「かむなづき（十月）」「しもつき（十一月）」「後撰詞書」には「きさらぎ」「しもつき」「拾遺詞書」には「きさらぎ」「みなづき（六月）」「しもつき」の使用例が、それぞれ存しないこともわかった。

以上、暦日関係語彙についていささかみてきた。

「後拾遺和歌集」の和歌の暦日的排列について、川村晃生氏は、

広く言えば文学（における季節）と現実（における暦日上の生活サイクル）との食い違いを解消するためであった⁽³⁹⁾

とされたが、このような撰者通俊の撰集意識の結果、「後拾遺詞書」において暦日関係語彙が頻用されたのであろう。

六

西端幸雄氏は、八代集について、その各歌集の和歌における使用語彙を精査された結果、「後拾遺和歌集」に歌風の転換点があるとすると

一般的な考え方に対して、

八代集を、語彙史の面から見ると、『拾遺集』に大きな転換点がある⁽⁴⁰⁾

とされた。

勅撰集は、当然のことながら、撰者の撰集意識が色濃く反映するものである。そして、詞書が「撰者の、読者に対する享受の指示⁽⁴¹⁾」である以上、「詞書」には、歌風の転換の反映がみうけられる可能性がある。

以下、西端氏のようなとらえ方が「詞書」の語彙に関してもいえるかどうか、「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」「後拾遺詞書」の語彙を用い、いささか考えたい。

まず、各「詞書」における初出語についてふれる。

「古今詞書」を除く各「詞書」における初出語は、七九四語、六七〇語、六八三語となるが、それらは、それぞれの異なり語数に対する比率で見ると、六二・二パーセント、五二・一パーセント、四三・四パーセントとなる。この数値からすると、「後撰詞書」における初出語の比率が非常に高く、「後撰詞書」の語彙の特異性が思われる。しかし、この数値には注意が必要であらう。すなわち、「詞書」に使用されやすい語の多くが、前の「詞書」における初出語とされるので、後の「詞書」になればなるほど、初出語は限定され、この点から考えれば、前述の数値は当然の帰結とも思われるからである。

一方、ある「詞書」が、その直前の「詞書」の語彙との程度共通

表(10)

	後拾遺	拾遺	後撰	古今
古今	0.771	0.759	0.818	
後撰	0.824	0.798		
拾遺	0.810			
後拾遺				

するかをみると、「後撰詞書」は四八二語、「拾遺詞書」は五四一語、「後拾遺詞書」は六三三語、それぞれ共通している。また、これらは、各「詞書」における異なり語数の、それぞれ三七・八パーセント、四二・〇パーセント、四〇・二パーセントとなる。

次に、水谷静夫氏が示された類似度 D' を計算すると、表(10)のようになる。

この表(10)から、「後撰詞書」の語彙と「拾遺詞書」のそれとの類似度 D' は〇・七九八と、「拾遺詞書」の語彙と「後拾遺詞書」のそれとの類似度 D' は〇・八一〇より、わずかではあるが低いことがわかる。

以上のような点からすると、「詞書」の語彙においても、和歌の語彙と同様に、「拾遺和歌集」あたりが転換点になると考えられなくはないが、なお検討の余地もあるので、この点に関しては、今後の課題としたい。

なお、「拾遺詞書」の語彙と「後拾遺詞書」のそれとの類似度 D' と、「後撰詞書」の語彙と「拾遺詞書」のそれとの類似度 D' との差が、前述のようにわずかである点には、注意を要するであろう。これは、四一三でもふれたように、「後撰詞書」の語彙と「後拾遺詞書」の語彙とに共通する散文的性格が、「拾遺詞書」の語彙と「後拾遺詞書」の

語彙との類似度 D' を低いものとし、結果的に、「後撰詞書」の語彙と「拾遺詞書」のそれとの類似度 D' と似たような数値になったのである。

七

以上、「後拾遺詞書」の語彙に関して、いくつかの観点から、その使用実態をみてきたが、その要点を再掲することにより、まとめたい。

1 「後拾遺詞書」の自立語語彙における異なり語数・延べ語数は、それぞれ一五七五語、九〇〇四語であり、平均使用度数は五・七二となる。

2 延べ語数の一パーミル以上の使用度数を持つ語を基幹語とする。と、「後拾遺詞書」のそれは、異なり語数で一八七語、延べ語数で六〇七一語となる。また、この六〇七一語は、全延べ語数の六七・四三パーセントに当たる。

3 「後拾遺詞書」では、「さき」や「ころ」が頻用されているが、これらは、二、三期の詠者の重視や、書式の統一・整備という、撰者通俊の撰集態度の結果であると考えられる。

4 「後拾遺詞書」の基幹語彙のうち、「平安和文基本語彙」とは共通しない語群には、和歌関係の「うたあはせ」「かきつく」「だいい」「むすびつく」等をはじめとする、他の多くの「詞書」の同様な語群と共通する。「詞書」の基層的なものと、撰者の撰集

意識による「はなみ」「つくし」等や、時代的制約を背景にした「いちでうみん」「えいしよう」等、ある種の時代語的なものが混在していることがわかった。

5 「後拾遺詞書」の語彙は、語種別構成比からみると、おおむね時代が新しくなるにつれて和語の比率が低下し、漢語の比率が高まるという、「詞書」の語彙における一般的傾向の枠内にある。

6 「後拾遺詞書」の語彙における形容語類の比率の高さは、時代的背景や資料的な問題を踏まえた、撰者通俊の撰集意識による「詞書の長文化」の結果と思われる。

7 「後拾遺詞書」における国名に関する語彙の使用には、他の「詞書」におけるそれにはない広さと多さがある。また、「月」を示す語彙も、歌数との関係からすると、他の「詞書」よりも頻用されていると言える。「後拾遺詞書」の語彙におけるこれらの特徴的な使用は、撰者通俊の撰集意識の結果と言えそうである。

8 語彙史の面からみた場合、「拾遺和歌集」に、その転換点があるとする考え方がある。「拾遺詞書」の語彙においても、初出語や類似度Dの結果からすると、それが言えそうであるが、なお検討の余地もあるので、この点に関しては、今後の課題としたい。

〔注〕

- (1) 『和歌大辞典』（昭和六一年三月、明治書院）三三五頁。
 (2) 川村晃生氏校注『後拾遺和歌集』（平成三年三月、和泉書院）解

題、一〇頁。

- (3) 久保田淳氏「勅撰集と私家集―平安後期の場合―」（『和歌文学研究』二五号、昭和四四年二月）、実川恵子氏「『後拾遺集』の詞書をめぐって」（『文芸論叢』一四号、昭和五三年三月）、武田早苗氏「後拾遺集の詞書をめぐって」（『中古文学』三九号、昭和六二年五月）、実川恵子氏「後拾遺集『題しらず』歌の二、三の問題」（『文芸論叢』一七号、昭和五六年三月）、武内はる恵氏「『後拾遺和歌集』の『題不知』をめぐって」（『和歌文学研究』五五号、昭和六二年一月）、井上宗雄氏「再び『心を詠める』について」（『立教大学日本文学』三九号、昭和五二年二月）、百目鬼恭三郎氏「後拾遺時代における歌枕の創出」（『共立女子短大文科紀要』二九号、昭和六一年二月）、実川恵子氏「後拾遺集『名所歌』小考」（『文芸論叢』二八号、平成四年三月）、川村晃生氏「『後拾遺集』巻頭歌群をめぐって」（『和歌文学研究』四二号、昭和五五年四月）、武田早苗氏「後拾遺和歌集の四季部・恋部の構成について」（『横浜国大言語研究』二号、昭和五九年三月）、川村晃生氏「和歌と漢詩文―後拾遺時代の諸相―」（『中古文学と漢文学Ⅰ』和漢比較文学叢書3、昭和六一年一〇月、汲古書院）、その他。

- (4) 以下、統計に関して『語彙表』とした場合は、宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄氏編『フロッピー版古典対照語彙表および使用法』（平成元年九月、笠間書院）による。

- (5) ただし、私意により読みを改めた用例がある。

- (6) 拙稿a「『古今和歌集』詞書の語彙について」（『湘南文学』一七号、昭和五八年三月）、拙稿b「『後撰和歌集』の『詞書』の語彙について」（『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』昭和六三年一

○月、桜楓社)、拙稿c、『拾遺和歌集』の『詞書』の語彙について(『城西大学女子短期大学部紀要』八巻一号、平成三年一月)。
以下、「古今和歌集」「後撰和歌集」「拾遺和歌集」の『詞書』に関しては、それぞれ前掲拙稿による。ただし、語数・比率等に関しては、調査対象範囲および読み方変更等による再調査の結果、その数値に異動がある。

(7) 歌数に関しては、後記する各索引の底本の歌数によった。

使用した索引は、西下経一・滝沢貞夫氏編『古今集総索引』(昭和三年九月、明治書院。底本は、貞応二年本)、大阪女子大学国文学研究室編『後撰和歌集総索引』(昭和四〇年一二月、大阪女子大学。底本は、高松宮家蔵天福二年本)、片桐洋一氏編『拾遺和歌集の研究 索引篇』(昭和五一年九月、大学堂書店。底本は、天福元年定家書写本臨模中院通茂筆本)。なお、「後拾遺和歌集」に関しては、既述、西端氏編書によった。

(8) (3) 実川氏論文(『文芸論叢』一四号)、武田氏論文(『中古文学』三九号)、その他

(9) 『平家物語の文体論的研究』(昭和五三年一月、明治書院) 八四頁。

(10) 『平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題』(『国語学』八七集、昭和四六年一二月)。

(11) 拙稿d、『千載和歌集』の『詞書』の語彙について(『城西大学女子短期大学部紀要』九巻一号、平成四年一月)、拙稿e、『新古今和歌集』の『詞書』の語彙について(『湘南文学』一九号、昭和六〇年三月)。以下、「千載詞書」「新古今詞書」に関しては、それぞれ前掲拙稿による。ただし、語数・比率等に関しては、調査対象範

囲および読み方変更等による再調査の結果、その数値に異動がある。
(12) 拙稿f、『詞花和歌集』の『詞書』の語彙について(『城西大学女子短期大学部紀要』一〇巻一号、平成五年一月)。以下、「詞花詞書」に関しては、前掲拙稿による。ただし、語数・比率等に関しては、調査対象範囲および読み方変更等による再調査の結果、その数値に異動がある。

(13) 傍線筆者、引用の後の()内の数字は歌番号。以下同じ。

(14) 上野理氏『後拾遺集前後』(昭和五一年四月、笠間書院) 第七章「後拾遺集の歌風」五二二〜五二四頁。

(15) (14)同書、五二七頁。

(16) 武田早苗氏は『後拾遺集』詞書についての一考察(『相模国文』一八号、平成三年三月)において、「作者表記や詞書中の人名、また先に取り上げた詞書記載においてもかなり根源的な整備・統一の意図を看取することができるのは、これらが後拾遺集の本性、その和歌観とでも言うべきものと深く関連している故ではないだろうか」とされている。

(17) 『金葉和歌集』の「詞書」に関しては、詳細な調査はしていないが、増田繁夫・居安稔恵・柴崎陽子・寺内純子氏編『金葉和歌集総索引 本文・索引』(昭和五一年一二月、清文堂)によれば、「ころ」は三五例、「とき」は六四例ある。この数値からしても、「後拾遺詞書」では「ころ」が頻用されていると言えよう。

(18) 例外と思われるものの歌番号を示すと、以下のようになる。

(二) (四五六) (五四八) (六九二) (七三三) (七三四) (七六四) (八四五) (二〇一九) (二一〇七) (二一三八) (二一六四)

(19) 本文は、片桐洋一氏『拾遺和歌集の研究 校本篇・伝本研究篇』

(昭和四五年一二月、大学堂書店)による。傍線筆者、引用の後の()内の数字は歌番号。以下同じ。

- (20) 「後拾遺詞書」における表現の統一・整備については、井上宗雄氏(3)論文、室達志氏「勅撰集の詞書の研究『後拾遺集』から『千載集』まで」(『国語国文学科研究論文集』二七号、昭和五七年三月)、武田早苗氏(16)論文、同「『後拾遺集』作者表記についての一考察」(『和歌文学研究』六四号、平成四年一月)等で詳述されている。
- (21) 「金葉和歌集」の「詞書」に関しては、(17)書により度数を数えた。なお、「金葉和歌集」の「詞書」の語彙における基幹語彙については未調査であるが、「すぐ」は基幹語ではないと思われる。
- (22) 心話中での用例とも考えられる。この用例を前述のようにとらえると、一〇例すべてが会話・書簡・心話での使用例となる。
- (23) (3)武田氏論文(『中古文学』三九号)。
- (24) たとえば、例11の歌に関して、「伊勢大輔集I」(『私家集大成 中古II』昭和五〇年五月、明治書院)をみると、当該部分の詞書は、あらたまのとしもわかなもつむ人は うつゑつきてやのへにい つらん
返
うつゑつきつまつまゝほしきをたまさかに 君とふ日のゝわかなゝ
りけり
のように「返」となっているだけである。このような点からしても、「けふ」の使用が撰者の撰集意識と関係あることがわかるであろう。
- (25) 「金葉和歌集」の「詞書」に関しては、(17)書により度数を数えた。

表 (A)

	和 語	漢 語	混 種
古今詞書	88.8	10.2	1.0
後撰詞書	87.9	10.7	1.4
拾遺詞書	77.3	20.0	2.6
詞花詞書	78.6	19.1	2.4
千載詞書	67.9	29.4	2.8
新古今詞書	70.7	26.5	2.8

表 (C)

	異なり	延 べ
古今詞書	6.7	5.4
後撰詞書	9.2	7.9
拾遺詞書	5.2	3.9
詞花詞書	7.9	4.9
千載詞書	6.0	3.4
新古今詞書	6.2	3.4

表 (B)

	名 詞	動 詞
古今詞書	68.1	24.7
後撰詞書	59.4	31.0
拾遺詞書	74.0	20.4
詞花詞書	66.9	24.7
千載詞書	73.5	19.2
新古今詞書	71.9	20.2

- (26) (3)久保田氏論文。
- (27) (2)同書、解題、一七頁。
- (28) 各「詞書」における和語・漢語・混種語の異なり語数での語種別比率は、表(A)のようになる。
- (29)(30) 各「詞書」における名詞・動詞の異なり語数での比率は、表(B)のようになる。
- (31)(32) 各「詞書」の形容語における異なり語数・延べ語数の比率は、

表(C)のようになる。

(33) (6) 拙稿b。

(34) (3) 武田氏論文(『中古文学』三九号)参照。

(35) (14) 同書によれば、「栄花物語」との共有歌は七一首(四四二

頁)、「今昔物語集」との共有歌は二八首(四五〇頁)である。

(36) ここでは、

正月七日、周防内侍のものへつかはしける (三七)

三条太政大臣左右をかたわきて、前裁うゑはべりて、… (二五二)

のような「すはう」「さんでう」も地名扱いしている。

(37) ここでは、

二月十五夜月あかく侍けるに、大江佐国が許につかはしける (一一八三)

(一一八三)

の「じふごや」のような例、「後撰詞書」における「しごぐわつ

(四五月)」のような例も、その対象とした。

(38) ここでは、「うるふやよひ(閏三月)」「くぐわつじん(九月尽)」のような用例は除外した。

(39) (3) 川村氏論文(『和歌文学研究』四二号)。

(40) 「語彙史の立場から見た『拾遺和歌集』」使用語句の性格を統計的に見る―(『国語語彙史の研究 十四』平成六年八月、和泉書院)。

(41) 井上宗雄氏「勅撰和歌集の詞書について―主として後拾遺集と新勅撰集の場合―」(『平安朝文学研究』復刊一号、昭和五六年七月)。

(42) 「用語類似度による歌謡曲仕訳『湯の町エレジー』」上海帰りのリル」及びその周辺」(『計量国語学』一二巻四号、昭和五五年三月)、『数理言語学』(昭和五七年一月、培風館)第三章「用語の類

似度」、『語彙』(朝倉日本語新講座2、昭和五八年四月、朝倉書店)

第五章第四節「数量化IV類による作品解析」、その他。

(平成六年九月三〇日)

(資料)「後拾遺詞書」の基幹語彙

順位	単語		度数
一	よむ	読詠	五八〇
二	いふ	言	二三四
三	つかはす	遣	二一九
四	ひと	人	一七六
五	もと	元本下	一七五
六	す	為	一四六
七	をんな	女	一三七
八	しる	知領	一二五
九	だい	題	一一三
一〇	まかる	罷	一〇二
一一	とき	時	一〇〇
一二	ところ	所	九三
一三	はべり	侍	九二
一四	ころ	心	八六
一五	みる	見	八五
一六	いへ	家	七七
一七	きく	聞	七三
一八	ころ	頃	七三
一九	うたあはせ	歌合	六八
二〇	あり	有	六三
二一	こと	事	六二
二二	かへし	返	五八
二三	はな	花	五八
二四	つき	月	五七
二五	のち	後	五五
二六	ひとびと	人人	五四
二七	うた	歌	五三

順位	単語		度数
二九	あそん	朝臣	五二
	ひ	日	五二
	をとこ	男	五二
三一	もの	物者	五〇
三二	なる	成爲	四九
三四	さき	先	四七
	また	又	四七
三六	まある	参	四七
三七	よ	夜	四一
三九	だいいやう	大臣	四〇
	かみ	上守	三九
四〇	かへる	婦	三七
四一	くだる	下	三六
四二	おもふ	思	三三
四三	びやうぶ	屏風	三三
四四	かへりごと	返言	三二
四五	みや	宮	三一
四六	く	来	二八
四七	なし	無	二八
四八	おなじ	同	二七
四九	かの	彼	二七
五〇	み	身	二七
五一	みち	道	二七
五二	おと	音	二六
五三	とし	年	二六

順位	単語		度数
五五	ふる	降	二六
五五	あき	秋	二五
五五	おこす	遣	二四
六一	この	此	二四
六一	だいいり	内裏	二四
六一	ほど	程	二四
六一	いひつかはす	言遣	二三
六一	かはる	変代	二三
六一	たてまつる	奉	二三
六一	あふ	合逢	二三
六一	うち	内	二三
六一	うち	地名	二三
六一	うへ	上	二三
六一	やま	山	二三
六一	ゆき	雪	二三
七〇	しのぶ	偲忍	二二
七〇	すむ	住	二二
七〇	つくし	地名	二二
七〇	おもひいづ	思出	一九
七〇	かく	書描	一九
七〇	なぬか	七日	一九
七〇	ひさし	久	一九
七〇	まかりくだる	龍下	一九
八一	まつ	松	一九
八一	かきつく	書付	一八
八一	ごれいぜい	後冷	一八
八一	みん	泉院	一八

順位	単語		度数
八〇	その	其	一八
八〇	なか	中仲	一八
八〇	ふみつき	七月	一八
八〇	やまざと	山里	一八
八〇	よし	由	一八
八〇	さくら	桜	一七
八〇	ちゆうなごん	中納言	一七
八〇	のぼる	上	一七
八〇	はる	春	一七
八〇	まうす	申	一七
八〇	まうす	詣来	一七
八〇	むすめ	娘	一七
八〇	まうす	繪	一七
八〇	いづ	出	一七
八〇	えいしよう	年号名	一六
八〇	かく	斯	一六
八〇	あかし	明赤	一五
八〇	いひおこす	言遣	一五
八〇	うす	失	一五
八〇	おくる	後遅	一五
八〇	かた	方	一五
八〇	かたらふ	語	一五
八〇	かよふ	通	一五
八〇	くらうど	藏人	一五
八〇	たつ	立	一五
八〇	とふ	訪問	一五
八〇	ふみ	文	一五

